



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                     |                                                                                                         |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 痕跡と記憶：広島の被爆痕跡をめぐるアートの表現と記憶継承の可能性〔論文内容及び審査の要旨〕                                                           |
| Author(s)           | 張，欣慧                                                                                                    |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                   |
| Degree Name         | 博士(学術)                                                                                                  |
| Dissertation Number | 甲第16113号                                                                                                |
| Issue Date          | 2024-09-25                                                                                              |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/93326">https://hdl.handle.net/2115/93326</a>                       |
| Rights(URL)         | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type                | doctoral thesis                                                                                         |
| File Information    | ZHANG_Xinhui_review.pdf, 審査の要旨                                                                          |



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：張 欣慧

|      |         |        |
|------|---------|--------|
| 審査委員 | 主査 教授   | 西村 龍一  |
|      | 副査 教授   | 玄 武岩   |
|      | 副査 准教授  | 増田 哲子  |
|      | 副査 北海道大 | 宇佐見 森吉 |
|      | 学 名誉教授  |        |

## 学位論文題名

### 痕跡と記憶

#### ー広島の被爆痕跡をめぐるアートの表現と記憶継承の可能性ー

本論文の審査は、2024 年 7 月 24 日午後 1 時から、メディア棟 105 教室にて公開で実施された。最初に 40 分程度、論文提出者より論文の内容について説明を行い、その後、審査員との質疑応答を 1 時間程度行った。

審査員からのコメントを総括すると、本論文の意義・評価点として、まず、現代アートと記憶文化を論じること、さらにそれを広島原爆を主題とした作品を対象とするという問題設定の興味深さが挙げられた。石内都や岡部昌生のような具体的なアーティストの事例を取り上げ、アルヴァックス等の記憶論、バルト等の写真論、記号論、都市論と多様な理論を用いて論じており、そのために多くの先行研究を渉猟している点が高く評価された。また、こうした多くの理論を参考にしながら記述していく際、日本語の表現が非常に巧みである点も好評を得た。さらに、原爆や記憶という論点を据えることで、本論文では、芸術作品についての考察が作品のなかだけにはとどまらず、社会に開かれたものとなっている点を評価するコメントもあった。これまで、個々の作家に関する先行研究は存在したが、複数の作家を原爆の痕跡というテーマのもとにまとめて論じたものは多くなく、この点でも本研究の学術的意義を強調することができる。また、1942 年生まれの岡部、その直後の世代である石内、さらに 1970 年代生まれの藤岡亜弥と三田村陽というように、本論文で取り上げた作家は戦争を直接経験した世代から現代の若い世代に跨っている。また、特に写真論に関しては、原爆を写した多様な写真家たちの作品を取り上げながら比較して論じている。こうした点において、本研究は、個別の作家論を超えて、原爆に対する芸術的アプローチの通時的変化の考察にもなっており、大きな学術的意義を見いだすことができる。

こうした点が肯定的に評価される一方で、全体として考察を深めるほど、「原爆」の痕跡ではなく、一般論になってしまうきらいがあるという懸念が挙げられた。アート作品を通して、「ヒロシマ」という固定化された語りにおいては埋もれてしまう記憶や、より多義的で論争的な記憶を想起させる可能性があるという本論文の主張は理解できるが、その際、個々の作品・作家に即した想起の内容や位相をもう少し限定して書くことができれば、一般論へと陥る危険を回避できたのではないかと指摘された。また、この点に関連して、特に第4章の論の運びが、全体として、個別の作品から離れてしまい、抽象的な議論になってしまっている点も指摘された。記号的な原爆のイメージから離れていかに歴史的事実に向き合うかというアーティストの挑戦を、あくまで写真表現において、より具体的に探究できればより論旨が明確になったのではという意見もあった。また、各章の記述は非常に興味深いものの、全体を通して見た場合に、「痕跡」という対象以外に全体を貫く概念的な補助線が不明確である点も指摘された。こうした不足により、本論文を芸術論として見た場合、各章で取り上げた個別の作家・作品を総体的に比較し、考察するレベルまで達することができていない部分があること、記憶論やメディア論として見た場合も、本論文が主張する「記憶メディアとしての痕跡」の役割について体系的な分類や考察が欠けているという意見もあった。

以上の総評とコメント、質疑応答の後、論文提出者とオーディエンスには退室してもらい、4人の審査員で20分～30分程度可否を協議した。博士論文の学術的水準は、最初の総評にあるような理由から十分に学位授与の水準を超えており、また、多くの文献・理論を読み解くため真摯に研究に向き合い、不断の努力を重ねた論文提出者の姿勢は高く評価できる点を確認した。記憶文化とアートというテーマは大いに発展の可能性があり、論文提出者の今後の研究の展開も期待できることから、審査員全員一致して合格とした。